

発言 ウクライナ侵攻は「見せしめ」

地田徹朗 (名古屋外国語大学准教授・センター共同研究員)

2月24日朝、プーチン露大統領は、ウクライナにおける「特別な軍事作戦」の実施を発表し、ロシア軍はウクライナに侵攻した。当初、ロシア軍は電撃戦を展開して首都を即座に掌握し、ゼレンスキー・ウクライナ大統領をつるし上げにして、ロシアのかいらい政権をウクライナに樹立するという見方が大勢を占めていた。

しかし、今のところそうはなっていない。ゼレンスキー大統領がウクライナ国内にとどまり、元俳優らしく映像で国民を鼓舞し続けたことの効果もあるのだろう。意図的かどうかは分からないが、戦線は膠着している。ただ、旧ソ連・中央アジアを専門とする筆者には、ある疑念が生じている。

ロシアは、実は開戦に先立って、用意周到に外交日程を調整していたことが分かってきた。2月22日、プーチン大統領はアリエフ・アゼルバイジャン大統領と会談し、軍事協力に関する内容を含む「同盟的協力宣言」に署名した。同日、ラブロフ露外相がメレドフ・トルクメニスタン外相をモスクワに迎え、アフガニスタン情勢も絡め、安全保障面での協力を会談の議題にした。トルクメニスタンは永世中立国であり、開戦前に会談をセットしておく必要があった。

そして、開戦当日の24日から翌25日にかけて、カザフスタンの首都ヌルスルタンでユーラシア経済同盟の政府間評議会が開催された。ロシアからはミシュスチン首相が派遣され、トカエフ・カザフスタン大統領と会談。ここには、ベラルーシ、キルギス、アルメニア、ウズベキスタンの首相が集まった。24日、マトビエンコ・ロシア上院議長は、二国間フォーラムの開催にかこつけてタジキスタンを訪問し、ラフモン大統領親子と会談した。プーチン大統領自身も、25、26日に、ミルジヨエフ・ウズベキスタン大統領、先述のアリエフ大統領、ジャパロフ・キルギス大統領と立て続けに電話協議を行っている。

これは何を意味しているのか。それは、プーチンが自らの勢力圏と考えている諸国に対する「踏み絵」である。今は、軍事侵攻してもロシアとは距離を取らないという「踏み絵」を踏ませている段階。これから、そのレベルが上がっていく可能性が高い。旧ソ連諸国との今後の関係を強く意識しつつ、停戦交渉の実施も含め、戦争の進捗を見極めてるように見える。

現実には起こってほしくないことだが、今後、クリミアよろしく住民投票などでドネツク、ルガンスクがロシアに併合されるようなことがあれば、当然ながらウクライナ軍はここを攻撃するだろう。その場合、集団安全保障機構(CSTO)の加盟国に、非加盟国からの攻撃を理由として軍隊を派遣するよう、ロシアが求めてくる可能性は否定できない。特に、1月の国内騒擾の際にCSTO軍を招いてしまったカザフスタンは難しい立場に立たされている。これは最悪の「踏み絵」である。筆者の懸念が杞憂であることを祈る。

どのような形であれ、各国が「踏み絵」を踏まなければ、威嚇や嫌がらせが待ち受けている。今般のロシアによるウクライナ侵攻は、旧ソ連諸国への「見せしめ」の意味合いも強いのではなかろうか。

(『毎日新聞』2022年3月3日付)